

H・A・ルバーキンとその図書館

—あるナロードニキ文献学者の生涯と思想—

今 井 義 夫

はじめに

いまでもロシア史研究のための最良の文献案内書のひとつとして国際的に知られている『書物の中で (Среди книг)』(1913—15, Москва 三卷)の著者ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ルバーキン (Николай Александрович Рубакин 1862—1946)の評伝が近年、アメリカとソ連で前後して出版された。

アメリカの書物は、ウイスコンシン大学のロシア史専門家アルフレッド・エーリッヒ・セン教授の著作『ニコラス・ルバーキン——書物のためのひとつの人生』⁽¹⁾ (以下、文中の引用ではIと記す)であり、ソ連の書物は、

アレクサンドル・ルバーキン (H・A・ルバーキンの長子。以下、文中では父親と区別するため小ルバーキンと記す)が一九六七年に出版した評伝『ルバーキン——書物の海の水先案内人』⁽²⁾の増訂第二版 (以下、文中の引用ではIIと記す)である。

わが国でルバーキンの『書物の中で』を利用した最初の専門家は、おそらくナウカ社の創始者大竹博吉であろうと思われる。彼は革命直後のロシアに入国してその実状に接した数少ない日本人の一人で、その後もソビエト文化のわが国への紹介に先駆的な役割を果たした人物である。

大竹は蔵書の一部を一橋大学経済研究所に売却した時、

(21) H・A・ルバーキンとその図書館

この書物を当時研究所の資料部に勤めていた細谷新治⁽³⁾に贈った。細谷の記憶によれば大竹の亡くなった年(一九五八年)の二、三年前のことだった。細谷は後年、これを佐々木照史(当時一橋大学経済研究所助手、現在埼玉大学教養部助教授)に貸して、その内容を彼の主催する経済資料研究会で報告させた。この報告をもとにして佐々木が書いた論文「ロシアにおける文献学の歴史——ナロードニキの文献学者H・A・ルバーキンの場合——」(『経済資料研究』第十一号、一九七六年)⁽⁴⁾はわが国におけるルバーキンに関する最初の紹介であった。本論では佐々木論文があまり紹介していないルバーキンの民衆啓蒙家、私設図書館運動家としての側面をとりあげて、このロシアのナロードニキ文献学者の果たした文化的貢献を明らかにしたい⁽⁵⁾。

(1) Alfred Erich Senn, *Nicholas Rubakin—A Life for Books—*, Newtonville, Mass., 1977. ヤン教授は一九七三年に英国で復刻された『書物の中で』の第一巻の巻頭に解説を書きこんだ。

(2) A. Рыбакин, "Рыбакин—Должан книжного моря", Москва, 1979.

(3) 細谷新治は一橋大学経済研究所および社会科学古典資料

料センターに在任中、同大学のロシア・ソビエト関係文献の収集に中心的な役割を果たした。彼の文献収集活動は、彼が資料部在任中に研究所長であった故・大塚金之助の指導がきっかけとなってはじまった。退官前の細谷の仕事のひとつに、ロシアの亡命政治家L・ベルンシュタインとB・スヴァーリンの文庫の一橋大学附属図書館への導入がある。(一橋大学附属図書館報『鐘』第五号—第七号、一九八〇—八一年に細谷によるこの文庫の紹介がある)

(4) わが国の図書館でルバーキンの著作を備えているところは少ない。もっとも多く所蔵していると思われる北大スラヴ研究センターは、『書物の中で』第一—三巻、『ロシアの土地の歴史』第一—二巻、その他、ルバーキンが一九〇三年前後に書いた革命運動のための宣伝パンフレット一〇点のマイクロフィルムを所蔵している(同センター・松田潤助手の調査による)。

(5) 筆者がルバーキンについて知ったのは、一九六八年—一九七〇年にかけてオックスフォード大学に留学中、同大学のテイラー・インスティテュートにおいてシモンズ氏(J. S. G. Simmons)のモラヴ文献学の講義を受講した時である。氏『ロマノフ文学目録』(RUSSIAN BIBLIOGRAPHY; LIBRARIES AND ARCHIVES—A Selective List of Bibliographical References for Student of Russian History, Literature, Political, Social and Philosophical Thought, Theology and Linguistics. By J. S.

G. Simmons, Oxford, 1973) にはルバーキンの『書物の中で』その他があげられてゐる。氏はセン教授の前掲書に同じ書評を書つてゐる。(The Slavonic & East European Review, Vol. LVII, 1979, pp. 136—137) 本論文の執筆に当つても氏の助言を得られた。

一 母の影響と革命運動へのあゆみ

ルバーキンのナロードニキ運動や図書館活動への関心は、一八八〇年代のロシアの青年層をとらえた社会的風潮によるものであったとはいへ、直接には彼の母、リーチャ・テレンチエーヴナ・ルバーキナからの影響に負つてゐる。

彼女は貴族の家の出身であったが、少女時代から進歩的文学に親しんだ。自然科学思想にも関心が深く、ダーウニズムを支持し、自らビュヒナーの『力と物質』のロシア語訳を手がけたこともある。彼女は一八六〇年代のいわゆる「解放された女性」の一人であった。彼女のサークルには文芸批評家ビーサレフもしばしば顔を見せしており、彼女自身も彼のニヒリズムに感染していたといふ(II・15)。ルバーキンが後に民衆向けの啓蒙書のな

かで一貫して科学的テーマをとりあげたのは彼女を介してのビーサレフの思想的影響があると思われる。

リーチャはペテルブルク近郊のオラニエンバウムの事業家と結婚した。彼女は子供たちの進学に無関心な父親にさからって、息子の大学進学のために首都に引越した。そして彼女自身もまた一八七五年、はじめ六〇冊の蔵書をもって有料貸出図書館を開いている。十三歳の息子ルバーキンもこの計画に参加していたという。この私設図書館は次第に大きくなっていったが、利益はさっぱりあがらなかった。なぜならば彼女の事業はもともと営利を目的とした貸本屋ではなく、民衆を啓蒙するための独自の社会活動をめざっていたからである。

解放運動の一環として私設図書館をつくるという運動は、ナロードニキのイシューチン・サークルなどが試みた運動であり、一八七〇年頃からロシア全土にひろがっていたのであった。

当時ペテルブルクで労働者教育にとり組んでいたH・K・クループスカヤの証言によれば、ルバーキン母子の私設図書館はペテルブルクで最初の合法的な有料図書館であり、労働者たちのマルクス主義学習サークルには無

料で書物を貸し出したこともあるという(II・78)。晩年十萬冊に及ぶ大図書館をもつにいたったルバーキンの文献学者としてのスタートは、このようなナロードニキの運動を背景にした母の小さな私設図書館の志をつぐことから出発したのであった。

ルバーキンはベテルブルク大学の自然科学部物理数学科に入学したが、コントの哲学に魅せられて、その知識学体系を自らの学習のなかに体现するために他の二学部(文学部・法学部)の教程をもすべて平行して履習しようとして試みる。三学部かけもちの履習という彼の超人的な努力は、遂に神経衰弱と留年という結果をもたらしたが、一年おくれの卒業にあたっては彼は成績優秀で、その卒業論文には金メダルが与えられている。またこの努力の結果、彼は科学についての体系的な知識を獲得したという自信をもち、後に「最後の百科全書派」⁽²⁾といわれたほどの博識の基礎をきづくことができた。彼のこの時期の克苦勉勵の習慣は生涯にわたって持続され、著書・パンフレット約二八〇点、雑誌論文約三五〇点、書評千点以上という彼のぼう大な著作活動が実現したのである。⁽³⁾

ベテルブルク大学在学中にルバーキンの反専制政府思

想と社会主義への関心も深められた。その面で彼にとつて大きな影響を与えたのはレーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフとの出会いである。ルバーキンは同じ学部に属していたウリヤノフの指導する革命的な研究サークルに加わり、彼の影響で非合法の学生組合^{スホ}にも参加していた。一八八七年に皇帝暗殺計画のかどでウリヤノフが逮捕され、死刑にされたことは、ルバーキンにとって深刻な衝撃であった。当時、彼がその心境をたくした自作の詩には、友人の死からの重苦しい印象、権力への憎しみ、民衆の権力へのあこがれなどが端的にうたわれている(II・24・25)。

この事件後、ルバーキン自身も学生組合への参加の件で警察に逮捕されている。父親からの保釈金で間もなく釈放され、大学を卒業できたものの、彼は教職に就くことを禁じられ、大学の教師となる道を閉ざされてしまった。

(1) 『書物の中で』の第一巻の巻頭には「この労作をわが母、リーチャ・テレンチエーヴナ・ルバーキナ(一九〇五年六月五日没)——二十年間書物のなかで働き、私に書物を愛し、その打克ち難い輝かしい力を信ずることを教えて

くれた——の思い出に捧ぐ」と記されている。

(2) Разгон, Л. В. Последний энциклопедист, В сб. «Пути в будущее», М., 1964.

(3) ルバーキンの著作二八〇点のうち二三三点が労働者、農民のための読物であり、四七点が皇帝政府により発禁処分となった。

二 民衆の中への図書館運動

ルバーキンの両親は大学卒業後息子が官職についてくれることを望んでいたが、権力や官僚主義を嫌った彼は父親の経営する製紙工場で働くことを選んだ。彼は担当した経理面での仕事で全く無能であることを証明したが、ここでの勤務は、彼に工場労働者たちとじかに接して彼らの生活習慣や欲求について知る機会をあたえた。また彼は、労働者にたいする宣伝には平明な言葉や表現が必要であることも学んだのである。

一八八〇年代のロシアの革命運動の主流は農民を革命の主体とみなすナロードニキ運動であり、ルバーキンもラヴローフらの「土地と自由」や「人民の意志」派にもっともひかれていた。しかし、ルバーキンにとって農民に接する機会は事実上稀れで、彼が接したのは都市の住

民としてのインテリゲンツィヤや工場労働者たちであった。彼には労働者たちの間にたかまっている学習意欲に応え、彼らの知的成長を助けることが当面の最大の課題と思われた。そこで彼は、母親がすでに手がけていた図書館活動を継承しながら勤労大衆にとって必要な自学自習運動を発展させるという事業にとり組みはじめた。

一八八八年にルバーキンは「読者研究計画の試み」を出版し、一八八九年には「人民出身の読者および作家の特色づけによせて」⁽¹⁾を發表した。さらに一八九〇年には、彼の所属する「ペテルブルク読み書き普及委員会」で会の活動の基本計画についての報告をしている。これらの活動によって彼は著名なナロードニキ思想家H・ミハイロフスキイに好感をもつて迎えられ、また農村作家・Γ・ウスペンスキイとも知り合っている。しかし、啓蒙運動によって民衆自身のなかから新しいタイプのインテリゲンツィヤの形成される可能性を信じ、それを助けようという彼の主張は、むしろ当時ナロードニキ批判を展開していたマルクス主義的傾向の思想家たち——ブレハノフ、ストルーヴェ、クループスカヤ、トゥガン・バラノフスキイ夫人ら——からの賞讃と支持を得ること

にもなった。

この時期にルバーキンは、図書館活動についての独自の思想を示す労作「ロシアの読書界についての評論」(一八九〇年)を書いた。彼はそのなかで、図書館活動の意義について、個人の趣味を満足させるためでも収益のためでもなく、書物を啓蒙の強力な武器として、図書館が国民教育全般のなかで独自の地位を占めるべきであると主張する。そしてそのための図書館の蔵書構成の基礎に、コントの知識体系のような科学的体系と哲学的図式が必要であるという。ただし、問題は図式そのものにあるのではなく、世界の諸現象の構成とそれが一致することであり、その実現のためには本質的に百科全書的でなければならぬとしている。またよい図書館の条件として、科学の全部門を充すだけでなく、読者の教養の高低にかかわらず、すべての科学について入門を可能にするような選書がなされている必要性を指摘している。

ルバーキンは図書館の利用者のためにも、またとくに自学自習者たちのために読書案内書としての図書目録の役割を重視した。彼によれば図書目録は当該図書館にとってのデータとして役立つだけでなく、図書館にとって

のいわば指針となるべきものであった。彼は生涯に『書物の中で』三巻を含む二十数種類余の図書目録を自ら出版している。⁽²⁾ 図書館活動を積極的創造的なものとするために彼はこれらの読者向けの図書目録に独自の工夫をこらし、文献の単なる羅列ではなく、懇切な読書案内、文献解説を加える独得のスタイルをつくりだした。彼のつくった図書目録のなかには労働者や農民たちの読書サークル用に編集したものやプロバガンヂストやアジテーター向けのもの、若い読者層のためのもの、図書館員用のもの、また教師用のものなどが含まれている。そのどれをとっても、あらゆる階層の人々へ科学への入門を可能にしなければならないという彼の信念がそこに反映している。⁽³⁾

一八九二年にルバーキンは母の図書館の管理をひきつぎ、その蔵書は一九〇〇年には五七、〇〇〇冊にまで増大した。当時ロシアには約一、〇〇〇の私立図書館があったが、そのうち蔵書目録を発行しているのはルバーキンの図書館だけであった(II・85)。

図書館に関心を寄せる多くの学者たちがその性格を単にアカデミックな施設、もしくは官製の公共機関として

しか考えないのにたいして、ルバーキンがこれを自由な個人の経営による民衆の啓蒙用施設として重視していたことは特徴的である。そこには支配階級による文化の独占を排し、書物を民衆解放の強力な武器にしようとする独自の思想があらわれている。⁽⁴⁾

ルバーキンの好んだモットーのひとつに「文化活動は手段であり、革命は目的である」(II・42)という一句があった。彼自身は積極的に職業革命家となろうとしたことはないが、図書の普及事業を自らは革命のための事業と自負していたのである。

皇帝政府はこのようなルバーキンの文化活動を常に危険視して、彼の活動を警察の監視下において。一九〇一年の首都のカザン寺院広場前の学生デモにたいする政府の苛酷な弾圧に抗議する署名運動に参加したことを理由に、政府はルバーキンをダウリダ県のアルシウトに追放した。彼はこの流刑地で結党後間もない社会革命党(エス・エル党)に入党している。やがて健康の衰弱を理由にクリムに移された彼はそこでは流刑中の作家ゴーリキイと出会い、以後生涯にわたる両者の交友が生まれる。一九〇三年に刑期を終えたルバーキンは、スイスのジュ

ネーヴを訪れて、そこで亡命中のエス・エルのメンバーやブレハーノフら社会民主党員に会っている。この時期にルバーキンは、エス・エル党および社会民主党のために革命的な宣伝パンフレットを合計二十六点も書いている。(筆名、セルゲイ・ネクラソフ、北大スラヴ研究センターにあるルバーキンのマイクロフィルム文書は、その一部である。)

他方、ルバーキンは自由主義者たちとのつながりも深く、一九〇〇年には彼らとともに、「ツァーリズムとの闘争のための委員会」と称する莫然とした組織をつくったりもしている。とりわけカデットのΠ・H・ミリユコフとは、その自学自習運動や通信大学の組織運動への協力関係を通じて一九〇三年まで結ばれていた。政治的にはともかく、ミリユコフの果したロシアへの文化的功績については、彼はその後も極めて高い評価を与えている(I・19)。

ルバーキンの視点は、屢々政党的であるよりもむしろ文化的であり、それ故に後にソ連の批評家からその階級的視点の欠除を批判されることとなった。しかし、それは彼の欠陥というより、彼のたずさわっている文化事業

上の必要であったと考えるべきであろう。

ルバーキンの二度目の追放の原因となったのは、一九〇四年のペテルブルクにおける帝室技術協会主催の技術・職業教育活動者会議の席上での彼の報告であった。

そこで彼は、「人民出身の独学者たち」と題して報告し、現下の社会生活上の重要な現象として労働者階級のもとで彼ら自身の戦闘的なインテリゲンツィヤが急速に育ちつつあるという事実を、具体的な統計数字をあげて指摘した。そして、知識を喝望しているロシアの人民に教育の機会と言論・出版の自由を与えることが必要であると主張したのであった。彼の報告は大好評をもって迎えられ、会衆の意気は大いに上ったという(II・65)。

この会議の二日後に警官がルバーキンの家を訪れ家宅搜索を行うとともにルバーキンを連行しようとした。その時彼は病床にあつたので、警官は彼の代りにそこに居合わせた彼の二度目の妻リュドミラ・アレクサンドロヴナを警察に連行した。そして、数日間留置した後、彼女にたいして内務大臣プレーヴェの名において、ルバーキンに五年間のシベリア流刑か、さもなければ国外への永久追放の刑が決定されていることを通告した。病弱

なルバーキンにとってシベリア流刑は死を意味した。親しい医師の助けを借りて、彼は国外追放を選び、再度イスに向かったのであった。ところが、同じ年の暮にプレーヴェの暗殺事件が起り、内務省の方針が変更されたので、ルバーキンは思いがけず追放を解除され、直ちにロシアに帰還することができた。

再度の追放にもめげず、ルバーキンは一九〇四年から一九〇五年のロシア第一革命の際には、ガボンにひきいられる労働者の運動を支援して積極的に活動している。同時に、この革命的動乱のなかで彼は最大の労作『書物の中で』の作成にとり組みはじめていた。しかし、彼の身辺には新たな逮捕の危険が迫っていた。一九〇五年七月に母親が亡くなり、長男のアレクサンドル(本稿での小ルバーキン)が政治的理由で警察に逮捕されたため、ルバーキンは難を避けてフィンランドに移住した。そこはロシアの統治下にあるといえ、ロシア本土にくらべてより自由な雰囲気が残されていたからである。しかし、ここにもまた警察の手が伸び、長男が再び彼の家で捕えられるに及んで、ルバーキンはついに国外への亡命を決意する。

ルバーキンにとって最大の問題は、母からひきついた十一万五千冊におよぶルバーキン図書館の蔵書の処置であった。このぼう大な蔵書を国外に搬出することは、当時不可能であったし、また書物を売却するということは彼には耐え難いことであった。彼はベテルブルグに創設されて間もない啓蒙団体「全ロシア教育連盟」にこれを寄贈することにして、自らはフィンランドに持参した書物だけを持ってスイスに亡命した。不幸なことに、連盟に寄贈したルバーキンの蔵書はその無責任な管理の結果、その後四散した。こうして、ルバーキンにとってロシアの第一革命前後の弾圧による亡命は高い犠牲を伴うことになったのである。

- (1) 雑誌『セーベルヌイ・ヴェースニク』に載った論文。
- (2) 『書物の中で』のサブタイトルには、「科学・哲学および文学・社会科学の諸理念と結びついたロシア語圖書の富の展望の試み。自学自習用の手びき、および一般教育用図書館、書店の図書購入の体系化のための参考書」と記されている。その内容については、前掲佐々木論文参照。
- (3) ルバーキンが編集出版した『人民カレンダー』は日付の下に各種の知識領域についての解説文を盛り込んだもので、その多くはルバーキン自身が執筆していた。その人氣

は高く、毎年二〇〇万部以上も刷られてロシア全土の農家はほとんどこれをもっていたという(II・38)。

- (4) 民衆啓蒙運動の先駆者としてのトルストイにルバーキンは強い関心をもっていた。とくにトルストイが「インテリゲンツィヤと民衆とは二つの異なる言葉を語っている」と指摘したことに刺戟され、その教えを乞うている。一八九二年にトルストイはこの若い啓蒙活動家にたいして、何故に民衆にむけて科学について書くのかを問うた。当時ルバーキンは民衆向けの科学的読物『自然』(一八九二年)、『動物の王国』(一八九三年)などを書いて最初の人氣を博していたからである。トルストイは彼にむかって、民衆に必要なのは人生の科学なのだと言及、禁酒や禁煙のようなテーマについて書くことをすすめている。これにたいしてルバーキンは、正確な知識の普及は蒙昧な正教会との闘いの最良の方法だと反論している。トルストイが説いた道德的裏づけのない知識は人民に有害であるという教えは、ルバーキンに深い印象を与えた。

三 スイスへの亡命と図書館の再建

一九〇七年、ルバーキンがスイスに亡命した頃、そこにはロシアからの亡命者や留学生たちが男女あわせて八、五〇〇人以上も滞在しており、ロシア人の巨大なコロニーを形成していた。彼らのなかでルバーキンは第二

のルバーキン図書館を開設して、以後四十年にわたる文化活動を開始する。彼の四十六歳の時である。

ルバーキンは図書館の場所を求めて、ジュネーヴ湖の東岸のモントルーに近いボウギイ・シュール・クラランに五階建の独立家屋を見つけ、そこに彼の新しい図書館を開くことにした。ここはロシア本国の出版社との連絡もとりやすく、諸外国の文献も入手できた。なによりもロシアと違って、ここでは亡命ロシア人をはじめ他国の政治亡命者たちとも自由に往来することができた。彼らのなかには、「土地と自由」派の老闘士、E・ラーザレフや、ルバーキンが学生時代からも尊敬していた「人民の意志」派の女性闘士ヴェーラ・フィグネルがいた。彼女は実に二十五年におよぶシリッセルブルク監獄での政治犯としての生活に耐えた後に釈放され、スイスに来ていたのである。彼女はラーザレフらとともにしばしばルバーキンの家を訪れて、ルバーキン夫人の弾くピアノの夕べを楽しんだという。

ブレハーノフはルバーキンの図書館を最大限に利用した一人であった。彼の名著『ロシア社会思想史』は、この図書館の資料を使って書かれたのである。ルバーキン

は彼をその不屈の闘志と論争の巧みさと、仕事への熱心さゆえに高く評価していた。二人は互いに尊敬し合い、著作の上で助け合っていたが、互いに親しい友人にはなれなかったという(I・26)。おそらく、両者の思想の相違が原因であったのであろう。第一次世界大戦へのロシアの参戦の可否をめぐる、ブレハーノフが祖国防衛の名のもとに参戦を主張してルバーキンにも働きかけたのにたいして、ルバーキンは反戦的立場をとってこれに同調しなかった。

レーニンもまたルバーキンの図書館をよく利用した一人であった。彼らはスイスではじめて出会ったが、お互いにそれ以前から知り合っていた。なぜならレーニンの妻クループスカヤはルバーキンの早くからの知人であり、ルバーキンはロシアの女性のなかでフィグネルと並んでもっとも尊敬していた女性だったからである。

レーニンについてルバーキンは一九一八年の論文で「意志と情念エモーションの人」と評している。そして、彼が本質的にはデスポットであり、「彼の思想のなかでは政治が無条件に倫理を支配している」(I・26・28)として、ロベスピエールの道を歩むことを予想していた。しかし、

第一次世界大戦への参戦問題については、ルバーキンはブレハーノフに同調せず、自らの組織していたジュネーヴの「ロシア人クラブ」にレーニンを招いて講演させている。しかし、この戦争を帝国主義戦争とみなして、国際的なプロレタリアートの名において反戦を説いたレーニンの講演はこのクラブの聴衆の間では不評であったという。

ルバーキンは、『書物の中で』のボルシェヴィキ文献についての解説をレーニンに依頼している。レーニンはこの労作の意義を高く評価して、一九一四年には好意的な書評を書いたが、そのなかでルバーキンの折衷主義や論争回避の原則については批判的なコメントを加えている。レーニンはまたこの労作が多くの協力者によってなしたのであろうと指摘しているが、実際には、ルバーキンがただ一人の助手とともにほとんどすべての作業を行なったのである。⁽¹⁾

レーニン以外にもルバーキンの図書館を利用した亡命中のポリシェヴィキは多い。⁽²⁾ そのなかにはA・A・トロヤノフスキイ、A・B・ルナチャルスキイ、H・H・クルレンコ、Γ・A・アレクシンスキイおよびD・3・マ

ヌイルスキイらが含まれている。後にレーニンのもとで革命政府の最初の教育人民委員となったルナチャルスキイについては、ルバーキンは当時その博識について尊敬していたものの、彼の書物の取扱いが乱暴なことからしばしば争いを起していたという。「ルナチャルスキイは真面目な人間ではない」というのが彼の評価であった(II・115)。

小ルバーキンの証言によれば、ルバーキンはメンシェヴィキたちを概して嫌っていたという。その理由も、同宿していたメンシェヴィキの農業理論家Π・Π・マースロフが彼の書庫から持ち出した書物をひどく汚して返すことからであった。そのため彼との間にも争いが絶えなかったという。書物の扱いによって、ルバーキンはその人物の品性を評価したのである。彼にとってそれは政党や信条以前の、より基本的な問題であった。

スイスにおけるルバーキンの交友関係はロシア人に限らなかつた。そのうちでもとくに重要なのはフランスの作家ロマン・ロランとの交友である。第一次大戦中スイスに移り住んでいたロマン・ロランの家はルバーキンの家から十軒ほどのところにあつて、両者はスイスに亡命

していたトルストイ研究家H・H・ピリュコフの紹介で一九一六年に知り合い、その後ひんばんに会合し、文通を重ねている。それまでロシアの作家としてはトルストイやゴロキイしか知らなかったロマン・ロランにたいして、ロシアについての認識を豊かにしたのはルバーキンであった。ロマン・ロランは彼の『戦時の日記』、一九一四—一九一九年のなかでルバーキンとの出会いについてふれ、彼から帝制ロシアの現実やロシア革命について多くを学んだことを記している。そして、彼を「近代ロシアの百科全書」(II・127)と呼んでいる。ロマン・ロランからのルバーキンへの影響としては、ロランの平和主義とそのもとなっているトルストイの非暴力主義思想について再評価をうながされたことであろう。両者の思想的影響関係については従来ソ連の研究者も見落しがちであり、今後の重要な研究課題であると小ルバーキンは指摘している(II・131)。

ここでスイスに亡命してからのルバーキンの政治的信条の変化についてもふれておこう。すでに記したように一九〇一年以来エス・エル党に入党していたルバーキンにとって、一九〇九年に暴露されたアゼフのスパイ事件

は、テロリズム否定と政党活動からの離脱という転機となった。

ルバーキンがエス・エル党の指導部に潜入していたアゼフを当局のスパイではないかと疑いはじめたのはルバーキンの入党の年からであった。その後も独自の調査をすすめてその疑いを深め、党の指導部にも訴えたが誰も彼を信用しなかった。ルバーキンの執拗な追究の結果、一九〇九年にいたってブルツェフの証言を得て、アゼフが他ならぬ警察のスパイであるという事実が明らかにされたのである。この事件を機会にルバーキンはエス・エル党を脱党した。以後、ルバーキンは自らを「超政党社会主義者」(I・27)と称していたという。一九二八年の彼の自伝的覚え書きには、この事件を契機に彼がエス・エル党を永久に脱党しただけでなく、自己の革命的な世界観からすべてのテロリズムを捨て去り、テロリズムよりも効果的で基礎的な打撃を敵に与えるプロバガンダの科学的理論研究に専心することになったと記している。(II・169)。

ルバーキンはアナキストでもなく、マルクス主義者でもなく、勿論ポリシエヴィキでもない。しかし、ロマ

ン・ロランが考えたような臨時政府の支持をもって足りるとするような自由主義的思想家でもなかった。(註)その本質において彼はラヴローフ的ナロードニキであった。彼自身は専制と闘い、民衆を解放し、社会主義共和国を実現するという自己の志に一貫して忠実であったと信じていたのである。

- (1) レーニン全集・邦訳・第二〇巻二七一―二七四ページ。
 (2) セン教授は多くのポリシエヴィキがルバーキンの図書館を利用したことを「奇妙なことに」(I・25)としている。ルバーキンは父の思想傾向をナロードニキよりもむしろ社会民主党に近いとしている(II・62)。ルバーキンは彼の図書館を広く公開していたのであり、党派的な差別はしていなかった。

- (3) ロマン・ロラン全集・邦訳・第二八巻、七一四ページ。
 (4) ロマン・ロランはルバーキンの当時の政治思想については、ミリニコフやケレンスキイを支持し、彼らの臨時政府の政策をもって当面は足りるとするブルジョアの思想家とみなしていたようである。ロマン・ロラン全集・邦訳・第二九巻一一七四ページ参照。

四 十月革命とルバーキンの思想

一九一七年十月のロシア革命にルバーキンは心から感

動した。ゴリキイに宛てた当時の手紙のなかで彼は「私の生涯の夢を実現したわが愛する、親しい、近くて遠い社会主義共和国ロシアを歓迎します。ロシアの勤労階級によろしく」(II・133)と記している。

ルバーキンはポリシエヴィキが勝利した原因を、彼らが「土地と平和」のスローガンを掲げてロシアの人民の真の代弁者となり得たからだと考えていた。そして、レーニンの党が政権を獲得したことを「論理的にほとんど不可避的な事実」(I・49)として認め、その綱領をロシアの人民の大多数の意見に適応したものとして承認している。他方、ケレンスキイの臨時政府の失敗は平和と土地改革の問題に不決断であり、少数民族の要求を考慮することを拒み、憲制議会の招集を遅らせたことによって人民の支持を失ったことであると指摘した。これに関連して、彼は連合国側がロシアの戦争継続を強要することによってその真の民主化と社会主義革命を妨げたことを非難した。アメリカ大統領ウィルソンの十四ヶ条の提案にたいしても、彼はそれが「ロシアの要求を抜いた三国協商の古いプログラムの総計」であるとして批判し、「ただロシアの民主化のみがすべての人民の利益を守る」と

主張している (I・49)。

ルバーキンのこのような十月革命観にはロシアの民主化と社会主義化を熱望する彼の当時の政治的信条が明確に反映している。しかし、それは彼がポリシェヴィキと全く同じ政治路線を選んだことを意味しない。彼はそのことを当時ロマン・ロランに宛てた手紙のなかでも記していた⁽¹⁾、一九一八年の三月に出版されたレーニンについての彼の人物スケッチにも、その政権の独裁化への予想を漏らしていたのである⁽²⁾。

ルバーキンは当時、スイスをはじめフランスの新聞・雑誌にロシア問題について寄稿していたが、以上のようなポリシェヴィキへの理解と連合国の政策への批判は読者の間に強い反発を呼びおこし、彼の執筆を拒否する出版社もあらわれた⁽³⁾。

スイス政府のロシア人亡命者への対応もロシア革命を機に変化した。革命の自国への波及をおそれたスイス政府は、一九一八年の戦後の社会不安のなかで起った労働者のゼネラル・ストライキをソビエト代表部によるそのおかしによるものとみて彼らを追放した。同時に政府はロシア人亡命者にたいする取締りを強化した。ルバーキ

ンはポリシェヴィキの同情者とみなされたためにとくに厳しい制約をうけた。一九一九年に彼はチェコスロバキアの書誌学会の招きで講演に出かけたが、スイス政府は帰国に当って入国ビザの発行を認めなかった。彼はやむなくベルンで三カ月も待たされることになった。

スイスに亡命していたロシア人は革命後にその大半が祖国に帰っていった。ルバーキンもまた直ちに帰国することを望んでいたが、彼のパスポートはすでに期限が切れしており、しかも、代表部すら追放されたスイスではソ連政府からの新たな交付はなかなか得られなかった。結局、彼はスイスにとどまって仕事をつづける覚悟を固めざるを得なかった。

ルバーキンの生活もロシア革命後は困難を増していた。それまでロシアから届いていた彼の出版物の印税も戦乱と革命のなかでとだえていた。彼の啓蒙的出版物は革命後のロシアでも広く愛読され、続刊されたものもあったが新政府は著者に印税を支払わなかった。スイスでのわずかな収入は彼の図書館の維持のためには足らなかった。彼自身の生活はきわめてつましく、小ルバーキンの証言では背広やコートは十年も同じものを着つづけていた

という。こうして苦心して維持した彼の図書館は、一九二〇年にはすでに四八、〇〇〇冊に達し、ゲルツェンの娘ナタリア・アレクサンドロヴナの文庫や第一インターの旧メンバー、グスタフ・ブローシエの文庫も加えられてその内容は一層充実した。この年、ルバーキンは彼の図書館をローザンヌに移している。

一九二二年二月十日付の手紙で、ルバーキンは旧友のゴリーキイにたいして図書館のための援助を要請した。そのなかで彼は自分の願いは図書館をソ連政府に買い上げてくれということではなく、彼自身がそれをロシアのために維持しておくためには借金の担保とならぬようにすることが必要であり、そのための自分の仕事がほしいのだと記している(II・141—142)。この時点ですでに、ルバーキンはスイスにとどまって彼の図書館を経営し、将来それをロシアに寄贈することを考えていたのであろう。クループスカヤはルバーキンの図書専門家としての能力と実績を高く評価しており、革命後に彼がロシアに帰って働くことを期待していたようである。一九二〇年代のはじめ、彼女は図書館員や出版関係の労働者たちの集会の席上、民衆のための書物の大量出版の計画について

語り、その事業の長としてルバーキンを予定していたという(II・143)。クループスカヤとルバーキンとの間にはその後も文通がつづき、彼は一九三〇年代のはじめに蔵書を死後ソ連に送ることについて彼女に相談している。ソ連政府がやがてルバーキんに彼の著作の新版の印税を支払い、一九三〇年からは年金を支給するようになった。その背景にはゴリーキイはじめ旧友たちの支持があったのである。

十月革命前後の困難な時期のルバーキンの思想には、それまでとは違って政治的現実への超越的な傾向が強まり、それが時には宗教的な傾向を帯びてきているのが目立つ。その最初のあらわれはトルストイの非暴力主義への彼の再評価である。この転換には、熱心なトルストイアンであった二度目の妻リュドミラや友人でトルストイ研究家のビリュコフ、および当時トルストイ主義に傾倒していたロマン・ロランの影響があった。一九三〇年代にはロマン・ロランを介してガンジーに接し、その思想と運動について感銘をうけている。テロリズムに幻滅したルバーキンは、彼らの影響のもとで、かつて批判

的であったトルストイの非暴力的不服従運動についてその積極面を評価しはじめたのも自然である。『書物の中で』の解説においても、彼はトルストイ主義を現存支配体制の変革の方法として最良のものとして記している。

一九二〇年以降にルバーキンがアメリカの新興宗派「クリスチャン・サイエンス」に傾倒したことは、さすがにロマン・ロランにとっても意外なことであった。小ルバーキンは、父親の人を信用し易い性格を指摘しているが、スイスでの同派の布教者シュネウル夫人が唱えたロシア民衆の精神的救済の訴えは、ルバーキンを心情的にひきつけたのであろう。ロランはルバーキンの新らしい信仰について、彼宛の手紙のなかで、ロシアの民衆にとってはアメリカの福音主義よりもむしろ回教系のバハイ教の方が適しているだろうと遠慮のない批評を加えている。この時期のルバーキンはうちつづく内戦下の祖国の民衆の窮状に胸を痛めていたのである。そして、帰国のかなわぬ亡命インテリゲンツィヤの孤独感をゴロリキイに書き送っている。

ルバーキンが図書館や文献学の基礎理論としての彼の「読書心理学（ビブリオオブシホロギヤ）」の研究に没頭し

たのもこの時期である。彼は長いスイス滞在でスイス人の間にも知己を得ていたが、幾人かの著名な心理学者たちと知り合い、彼らの推挙によって一九一八年からジュネーヴのジャン・ジャック・ルソー教育学院で読書心理の研究セクションを担当することになった。彼自身の図書館をふくめた研究所で、彼は書物と読者との伝達関係について独自の心理学的説明をめざし、ぼう大な調査資料と著書をつくりあげる。その理論の核心は読書による効用は書物の内容によるものでなく、書物を単なる媒介とする読者自身の体験のよみがえりによるとする、書物による一種の言語的条件反射論を思わせる新説である。それはマルクス主義者からは観念論もしくは不可知論として批判され、その著書の難解さも手伝って今日では忘れられがちである。しかし、その内容は教示に富んでおり、改めて検討さるべきであらう。

(1) ロマン・ロランは、一九一七年革命後のルバーキンについて、「彼は自国の膨大な民衆のなかに目ざまされてい
る若々しい力に満ち満ちたされています。彼は時の指導者たち
（ポリシエヴィキ……引用者注）と説を共にしようとし
ませんでしたが、それも空しく、今や彼は、かの地で解き
放たれた新しい生命の奔流と、彼の希望に開かれた限りな

き未来を享受しています。」と記している。ロマン・ロー
ン全集・邦訳、第二九卷、一三九一ページ。

(2) ルバーキンが人物シリーズとして書きはじめた革命家
たちの人物評伝の第一巻。十月革命が勃発したため、以後、
新政府批判を避けて執筆をとりやめた。

(3) ルバーキンの息子アレクサンドル(小ルバーキン)は、
当時フランスでロシア軍付の軍医をしていたが、ボリシエ
ビキ作家の息子という理由でフランス政府からその職を追
われた。

五 ソビエト時代のルバーキン図書館

スイスのロシア人亡命家たちの大半はロシア革命後ロ
シアに引き揚げそのあとにルバーキンと彼の図書館がと
り残される形となった。そのうえ西欧諸国の革命ロシア
への外交断絶が重なったために、彼と彼の図書館の存在
意義はかえってたかまることになった。ルバーキン研究
家のE・H・アレーフィエヴァはこの間の事情について
「十月革命以後H・A・ルバーキンの図書館はヨーロッ
パにおけるソビエト・ロシアの独自の文化代表部となっ
た」(II・134)と記している。スイスとソ連の間に第二
次世界大戦まで外交関係がなかったという状況のもとで、

彼の果たした橋わたしの役割は大きかった。

ルバーキンの図書館は広く読者に開放されていて、ス
イスはもとより、他の国々からの学者や教育者・作家・
学生などが利用し、固定的な利用者の増加によって財政
も改善された。来館者の数は一九二五年に約五〇〇人、
一九三一年には一、五六四人、一九三九年には一、六〇
〇人にたっした。

一九二四年にルバーキンは国際連盟の知的協力委員会
の要請で国際的文献インデックスのためにソ連の出版機
関や定期刊行物のリスト作成に協力し、一九二五年から
一九二九年まで同委員会の発行する「各国で出版された
注目すべき著作」リストのためにソ連の出版物を紹介し
ている。ソ連政府は一九三四年まで国際連盟に加入して
いなかったため、この間ルバーキンが国連でソ連文化を
代表していたことになる。彼はまた一九二八年から三一
年にかけて、ジュネーヴの国際教育局の出版する児童文
学カタログのロシア部門の作成を担当した。さらに一九
三〇年から三四年まで、彼はモスクワの「国際図書(メ
ジクニーガ)」のためにソ連の定期刊行物のリスト作成
に協力している。

ルバーキンのこのような国際主義的な活躍は常に祖国ロシアの文化への愛着と結びついていた。彼は長びくスイス滞在にもかかわらずピリユコーフのようにスイスに帰化することなく最後までソビエト・ロシアの国籍もち続けていた。しかし、そのルバーキンにもスターリン時代の寒風は吹き込んだのである。

一九三六年にA・ルビンシュテインなる人物がブルジョア的、反レーニンの書誌学を摘発するとして、その論文のなかでルバーキンとその書誌的著作をとりあげて批判した。彼によってルバーキンは「トロツキスト的メンシェヴィキ的逃亡奴隷の隊列のなかにある敵性作家の一人」とされ、ソビエトの作家たちはその影響から解放されなければならないとされた。⁽¹⁾この非難のあとでソ連国内の多くの友人、知人たちがルバーキンとのかかわりを当局に疑われるのをおそれて次第に遠ざかっていった。ルバーキンとの文通すら避ける者が多かった。ソ連での彼の著作の出版も不可能となった。ソビエト政府はひきつづき彼に年金を送ってきたが、彼はソ連の知人、友人たちとのつながりを失ったのである。

スターリン時代のソ連の半鎖国的状況のもとで、ルバ

ーキンの私設図書館はふたたび西欧におけるソビエト・ロシア文化のインフォメーション・センターとしての役割を担うことになった。従来以上に多くの人々が彼の図書館を訪れたし、ルバーキンはY M C Aの協力を得て、スイスの諸学校に教材として各種のロシア語図書を送ったり、出版を試みた。

第二次世界大戦中、一九四三―四四年にかけて、戦禍を逃れてスイスにたどりついたソ連の市民や、ナチスの集中拘置所を脱出したソ連軍人は一万人以上になった。⁽²⁾ルバーキンは彼らをソビエトの大衆からの彼の図書館へのはじめての読者として歓迎した。彼はかつて第一次世界大戦中に試みた捕虜收容所の兵士への図書供給の経験を再現して、これらのソビエト人たちにロシア語の書籍を大量に貸出している。貸出した図書の多くが返還されずに終わったとはいえ、これらのロシア語の書物は異郷の地に閉ざされた彼らにとって大きな慰さめであり、心の糧であった。ルバーキンは外交代表部もない彼らのためにスイスの公的諸機関との交渉もかかってでている。それらの恩恵に浴した人々からルバーキンに宛てて送られた数多くの感謝の手紙が保存されている。そのなかには将

校や下士官を交えた戦時脱走捕虜の軍人グループからの感謝状もふくまれているという(II・184)。

一九四五年に第二次世界大戦が連合国側の勝利に終り、スイスとソ連との外交関係も成立した。ルバーキンにとってはじめて祖国復帰の機会が訪れたかと思われたが、彼はすでに老齢で病気がちであった。祖国ロシアへの帰還のねがいを果せぬままに、ルバーキンは一九四六年十一月二十二—二十三日の夜半に永眠した。

ルバーキンの遺骨は、一九四九年にモスクワのノヴォジェヴィツチ墓地に埋葬された。その墓石は書物を形どり、その上に彼の蔵書スタンプを形どった石をのせた質素なものであった。石の書物には「真理と正義のたたかいるための最も強力な武器——書物万才——」というルバーキンの生前のモットーが刻まれていた。

ルバーキンが残した蔵書は、八万冊から十万冊に及ぶといわれ、ヨーロッパで最大級のロシア・ソビエト文献コレクションである。すでに彼の生前から各国の図書館や大学からの引き合いがあった。⁽³⁾しかし、ルバーキンの遺志に沿って、それはモスクワのレーニン図書館に送ら

れることになった。一九四八年以来それらは『P6^{ズナド}文庫』のマークを付されて書庫に保存されている。

ルバーキンの手稿類を中心とする貴重な諸資料は、彼の助手兼家政婦であったマリア・ペトマンの手に残されていた。彼の死後二年目にその総量の三分の二(ダンボール箱四〇〇個分)がモスクワに送られてきたものの、残りの三分の一は遂に届かなかった。小ルバーキンはペトマンの死(一九六四年)の後にこの残りの資料を探し求めてスイスに赴いたが、そこで知り得たことは、彼女が帰依していた「生き仏」リンドなる者を教祖とする宗教セクトの手によって、すべてがすでに破棄焼却されていたことであった。(I・191—193)

(1) A. Рубинштейн, В плену и буржуазных теоретиков, Английские теории в книговедении, "Журнал ист." 1932, No. 2, стр. 9—12.

(2) 当時スイス国内には、ソ連人のために八八個所の收容キャンプがつけられていたという。

(3) ルバーキンの蔵書の購入を申し入れたのは、ニューヨーク公共図書館長ライデンブルク、ベルンのスイス国立図書館長M・ゴージェ、その他バーゼル大学図書館、パレスチナ国立図書館などがある。ニューヨークの有名な書籍商

H・P・クラウスもルバーキンの蔵書を購入しようとした一人であった。結局ソ連政府がこれを占有したのは、ルバーキンへの年金受与の際の条件であったと主張したからであった。

あとがきにかえて

本年三月から四月にかけて、筆者はモスクワとオックスフォードを訪れて、それぞれの場所でルバーキンに関する前記の二評伝を入手した。

アレクサンドル・ルバーキンの伝記は、実子による父の伝記であるために回想的資料が豊富にふくまれていて貴重である。その内容はスターリン時代に不当に評価されたルバーキンの名誉回復をめざすかのように意欲的で、時にはルバーキンをナロードニキ的思想家というよりも社会民主党に近い革命的思想家として描いている。

他方、セン教授による評伝は小著ながら、レーニン図書館のルバーキン文庫の手稿などを広く利用してルバーキンの実像に迫ろうとした好著である。そのなかではとりわけルバーキンの超党派的な活動や、スターリン時代の受難が客観的に描かれていて有益である。しかし、そ

の書物のカバールのイラストでルバーキンの肖像を歴代のロシア皇帝の肖像の頂点にかかげているのは、すでにシモンズ氏がその書評で指摘しているように、反専制主義者の伝記としてはいささか奇異である。

筆者の本稿でのルバーキン像は、主にこれらの先学者たちの労作に依拠しつつ、ロシア社会思想史研究者として試みたひとつのスケッチにすぎない。佐々木が彼の論文で指摘したように、ルバーキンの文献学者としての活動の背景にはノヴィコフ以来のロシアの文献学の伝統や、十九世紀のロシアの民衆解放思想の伝統がある。それらの伝統の研究は、ルバーキンの思想の理解を深めることになる。筆者は、ルバーキンがそのような伝統を担いながら、図書館活動のなかで新しい境地を開き、さらに国際的な活動の場においてナロードニキ主義を展覧させて、独自の人類主義・平和主義に到達したことに注目した。文献学者ルバーキンの業績の研究は、わが国のライブラリアンの重要な課題であろうと思われるが、筆者も社会思想史研究者として彼の思想の研究をさらにつづきたいと考えている。

本論文の執筆にあたって、筆者がルバーキンをとりあ

げたのは、文献学者としてロシア社会思想史研究に深い理解をもつ細谷教授の特集にふさわしいテーマであると考えたからであった。執筆を進めるうちに、同氏と筆者の共通の恩師であり、生涯にわたって書物の収集に努め、二つの大塚文庫（現在、東ドイツ国立図書館と一橋大学附属図書館にある）を残して、一九七八年にルバーキンと同じ八十四歳で亡くなった大塚金之助先生の

生前の姿を思い出さずにはおられなかった。書物をこよなく愛しながら、それを民衆解放と世界平和のための手段としようとした両者の志に多くの共通点を見出したからである。⁽¹⁾

(1) 『大塚金之助著作集第五巻、わたしの読書遍歴』（岩波書店、一九八一年）の細谷新治による巻末解説を参照。

（工学院大学教授・一橋大学講師）